

婦人宣教師、ミセス・プラインの

「おばあちゃんの手紙」(2)

～アメリカン・ミッション・ホームの

創立者の一人～

小林 恵子

今回は三人の米国婦人宣教師が一八七一(明治四)年横浜で社会問題になった混血児の養育と女子教育のため日本に来るようになったいきさつと時代の背景などについて述べた。

今回は、三人の婦人宣教師の一人、ミセス・プラインの書いた『おばあちゃんの手紙』について紹介し、本題へと入っていききたい。

プラインの書いた『おばあちゃんの手紙』の本について私が知ったのは、次のようないきさつからである。以前のことになるが私は、「日本で最初の私立幼稚園の誕生に貢献した婦人宣教師—アメリカン・ミッション・ホーム(現・横浜共立学園)を起点として」と題する拙論—国立音楽大学研究紀要第十八集(昭和五十九年発行)を書いた。その一冊をドクター・ヘボンの研究で著名な高谷道男先生に送呈したところ、先生からは是非、ミセス・プラインの『おばあちゃんの手紙』を読むようにと指導して頂き、この本が横浜開港資料館にあることを教えて下さったのである。こうしたいきさつから、私は

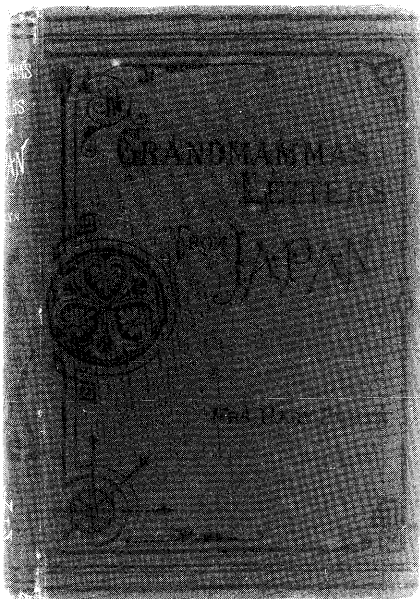
横浜開港資料館に何度か足を運び、『おばあちゃんの手紙』を読ませて頂くことができた。この紙面で高谷先生ならびに横浜開港資料館に心からお礼を申しあげたい。

さて、ブラインの書いた『おばあちゃんの手紙』は、

原文が『Grandmama's Letters From Japan』と題され一冊の本になっている。これは、ブラインが日本に滞在中（1871—1874）に故郷、ニューヨーク州のアルバニー（Albany）に住む孫たちや日曜学校の子どもたち、勤務していた職業学校の生徒たちにあてて書いた手紙のなから二十九通を選んでまとめたものである。その多くは孫たちにあてて書いた手紙であったから『おばあちゃんの手紙』と題し、日曜学校の子どもたちを主たる目的として出版された。しかし今日からみて、この本は当時の日本を婦人宣教師がどのように感じ受けとめたか、とりわけホームにおいての幼い混血の子どもたちの養育、女子教育について実践されたことの記録として『おばあちゃんの手紙』は貴重な文献である。宣教師が書いたものであるから宗教色の強いものであるが、それ

だけに目的が明確にうちだされ、生き生きとしたスピリットが手紙のなかにこめられている。ボストンの James H, Earle, Publisher から一八七七年に発行されている。写真は『おばあちゃんの手紙』の本の表紙で、江戸幕府を築いた徳川家の家紋「三葉葵」が描かれている。

ミセス・ブラインは一八二〇年三月三十一日、ニュー



▶『おばあちゃんの手紙』の表紙

ヨーク州の生まれで、日本に来るまでは米国婦人一致外国伝道協会（W・U・M・S）のアルバニー支部副会長をつとめ、協会の日曜学校や職業学校で子どもたちを教え、すでに孫もいるやさしいおばあちゃんであった。彼女が日本に来ることになったきっかけは次のようなことであった。

彼女は『おばあちゃんの手紙』の「まえがき」で述べているが幼い頃から異教の国に宣教することに強い願望を抱いていた。一八六九年一月に横浜の宣教師、ジェームズ・バラが帰米しており、彼女の家に六週間ほど滞在した。註(1) このとき、プラインはバラから日本の実情について話を聞き、混血児の養育と女子教育のために働く婦人宣教師を強く求めていることを知った。彼女は、これを自分と呼びかけている神の声と知り、祈りのすえ遂に宣教師として日本に行くことを決断したのであった。

こうして、米国婦人一致外国伝道協会の派遣で一八七一年（明治四）年六月、横浜に来たがそれは彼女の五十一歳のときである。協会のポーキプシー支部からミス・ク

ロスビーが、ケンタッキー支部からはミセス・ピアソンが彼女のアシスタントとして参加した。当時の日本は今日と違って社会情勢は様々な危険を孕み、キリスト教禁制の高札がたっていただけに彼女の年齢で海を越えて異教の地で宣教することは今では考えられない大変な勇気と決断を要した任務であった。

プラインがいかにかに心のあたたかい人であったかということは、『おばあちゃんの手紙』のなかで読者に感じとって頂けると思う。彼女はホームの精神的な母であり、幼い子どもや娘たちの気持ち思いやる優しさと統率力を兼ね備えていた。説明はこの位にして『おばあちゃんの手紙』の目次からはいっていききたい。

『おばあちゃんの手紙』

目次

（一）は、手紙の日付
一、千二百マイルの船旅：船の生活と乗客たち：子ども達の祈り
（二八七一（明治四）年、六月六日）

二、横浜へ無事到着…安息日の朝…氣立てがよく親切な日本の子供たち (七月二日)

三、台風…幼い女の子…キャリーの信仰 (八月二十六日)

四、ホームに來た子どもと少女たち…熱心に学ぶ人達、仏像、

お寺の慣習…ジョージ (十一月二日)

五、いろいろな仕事…もつと大きな建物と教師が欲しい…日本の日本人による最初の祈禱會…エディーとアニーのこと

(一八七二(明治五)年…一月七日)

六、貯金をする…日本のお正月…新年の祝い方…風と人形…

家々の飾りつけ…日本の宗教儀式 (二月二十六日)

七、ノナ…彼女の父親と母親…不幸な生い立ちと氣質…讚美歌を歌う微笑ましい光景 (四月十八日)

八、米国出発を記念して…東京灣の向こうへ遠足に行く…日本の渡し船…乗り物に乗る…日本の稲作…梨の木の手入れ…

初めての外国婦人の訪問…佐久間氏の家と美しい庭園…奇

妙な習慣と料理 (五月十五日)

九、日々の恵み…横浜での大きなお祭り…中国人墓地…奇

妙な儀式…悲しい光景 (六月二十日)

十、日本の子供たち…人数の多さ…優れた資質…赤ん坊を背負う子供の姿…お願い (八月六日)

十一、召使いたち…彼等の家庭の祭壇…法に背き庄の助が先にたつて…チャリー (七月二十六日)

十二、佐久間氏を訪ねた話の続き…奇妙なベッド…同じ毛布で

寝たり食べたり…かのう山…雷雨…山中の一夜…佐久間氏宅での集会 (十月十二日)

十三、男の子たちとの別れ…悲しい日…小さな女の子のアニー

(十一月十日)

十四、地震…家々への影響…恐れおののく人々…神に守られ無

事 (一八七三(明治六)年…三月十二日)

十五、小さな子どもたちのピクニック…庭園で…お茶のテーブル

ル…ゲーム…楽しいひととき (四月二十日)

十六、静岡へ…古いお寺を訪ねる…人力車に乗って…外国婦人

を見ようと押しかける群衆…美しいが厄介な贈物…日本の

音楽…地元の婦人たち (五月九日)

十七、子どもたちのバザー…アメリカからの贈物…幸せなひと

とき (五月十六日)

十八、私が愛する二つのホーム（日本と米国の）…ミニ…彼女の祈禱会
（七月十日）

十九、横浜でのクリスマス…クリスマスツリー…ポップコーン…陽気な仲間たち…アルバニーの一少女が私たちのために開いたバザー
（一八七四（明治七）年一月四日）

二十、おばあちゃんは手紙を書くのが大好き…女の子の一人…病気の父親を見舞う…子どもの歌と祈り…父親の苦心…お茶会（じっこ）
（二月十八日）

二一、アルバニー職業学校の仲間たちへ…日本で最初の日曜学校と現状報告…贈物への感謝
（三月十八日）

二二、箱根で…快適な避暑地…日本の民家…庭園…祭と興奮する群衆…人々に伝道する
（八月二十日）

二三、日曜学校の子どもたちへ…日本における最初の無料の学校…校舎…寄宿舎…おそのという名の少女…実践による進歩
（一八七五（明治八）年一月十八日）

二四、女の赤ちゃん…キティ…幸せな父親…私は感謝で一杯
（二月二十日）

二五、日本の伝説上の歴史…興味ぶかい伝統的習慣（二月六日）

二六、山の旅…改良したかごに乗って…大雨に遭う…はらはらするような経験
（六月二十日）

二七、赤ちゃんのキティの死…キリスト教による埋葬…貴重な教訓…ホームの寝室について
（六月二十七日）

二八、夏の休暇…海辺のリゾート…親切な宿の主人…讚美歌を歌う
（八月二日）

二九、日本からの最後の手紙…しっかり根をおろし設立されたホームと学校。ミス・M.G. Brainardの詩から
（八月二十九日）

はしがき

私は子どもたちを愛し信じていますが、それだけでなく、彼等の将来に及ぼす影響について何か予言者のような靈感もっています。私は子どもたちが彼等の信仰と愛によって成就される将来のことについて非常に大きな期待をもって見守っているのです。自分の子どもも時代の事を振り返ってみると、なぜあんなに夢中になってやったのかと思うほど寸暇をおしんで伝道活動に関した資料

を集めていたことを私は思い出します。一番はつきり覚えていたのは、まだ小さな子どもだった頃、もし許されれば異教の国へ行ってイエス様のことを知らせたいという願望で胸が一杯になったことです。

四十年間、この願いは子どもたちや貧しい人たち、社会から見捨てられた人々のために働くことでその捌け口を満たしてきました。でも、今、神は私を召して下さったのです。異教徒の国へ行き、お前が幼い頃から願ってきた思いを実現しなさいという呼び声がはつきりと感じられたのでそれが神の声であることを私は疑いませんでした。

私はいつも思うのですが、十歳にもならない幼いときに私に与えられたあの願望が、この困難であるが喜びも大きいこれからの仕事に対する準備の始まりだったという事です。そしてあれから、半世紀もの年月がたっています。

私が出発するとき、私の愛する家族だけでなく日曜学校や職業学校の大勢の子どもたちが心あたたかく思いを

よせ見送ってくれました。私が宣教師として赴任するところから、子どもたちは宣教師の仕事に興味をもち、改めてその意義を認識しようでした。その後、これらの子どもたちからよせられた「私たちは、先生と先生のお仕事のために祈りしています」という愛らしい手紙を遠く海を隔てたホームで読んで幾度、勇気づけられたことでしょう。子どもたちに手紙を書くことは私にとって楽しみでした。それは、私がいとも故郷の子どもたちのことを思い愛していることを伝えるだけでなく日本の国と人々についての実情を知らせたかったです。そして彼等の思いやりの心を育て、日本での私たちの仕事に何か実際に援助をしてくれるようしむけたかったです。

手紙はどれも急いで書かれたもので、宛て先の子どもたち以外の他人の目に触れることなど思ってもいませんでした。きちんとよく考えて書こうとしたものではなく、その手紙はどれも日常的な出来ごとを書いたにすぎないのです。真実で実直に書いたというしか価値はないと思います。でも、これらの手紙を読んだ私の友人が恐

らく友人のよしみで親切に言ってくれたのでしようが、この手紙には日曜学校の子どもたちに興味のあることが一杯書いてあるし、また私が子どもだったときに与えられたと同じような強い願望を誰かに与えることができるかも知れないときりに言うのです。

私が手紙を書いた子どもたち—その手紙の多くは私の孫たちですが—の同意を得て、その手紙から何通かを選びそれを易しく親しみやすい文章にして『おばあちゃんの手紙』と題してまとめました。そして私はこれを日曜学校の子どもたちやクリスチャンの家庭の子どもたちに送ったのです。

*

私がまだ小さい子どもだった頃、ニューヨークに連れて行って貰ったことがあります。そのとき、Nibleo Gardenと呼ばれる当時としては非常にファッショナブルなところで開かれていたAmerican Instituteのお祭りに兄と一緒に行ききました。そこでのことですが、大きなテーブルの上に立派なガラスのケースが並んでいて、そ

の中に入っている素晴らしい品物を見ようと大勢の人々はその周りに集まっていました。兄が何人もの人にこの品物について尋ねましたが判った事は次のようなことでした。つまり、この品物は世界の遠く離れたところにある日本という国のもので、その国のことや人々については非常に珍奇だということ以外は誰も何も知らないということでした。ただ年に一度、わずかのオランダの貿易商人たちがその地を訪れ、彼等の珍しい品々を買うことが許されているというのです。そのガラスケースの中にあつたのは、日本で買い求めた美しい品物の幾つかでした。それはオランダ商人がアメリカの商人に売ったもので、見知らぬ遠い国からきた非常に珍しい貴重な品物だとしてそこで展示されていたのです。

あの頃から思えば、時代は何と大きく変わったことでしょう。この『おばあちゃんの手紙』を読む子どもたちは今ではもう誰一人として私の兄が尋ねたとき何も知らなかった大人のように無知な子はいないでしょう。日本は今や我々に最も近い異教の隣国なのです。そして私た

ちの国や他のすべての国の旅人たちは珍しい日本の人々や非常に美しいこの国を自分の目で見ようと始終、訪ねています。日本の豪華で優美な調度品も欲しいと思えば誰でも自由に見えるようになり、すべての文明国の裕福で趣味のよい家々で見ることができるようになりました。

また、日本の国の歴史も私たちの学校の教科書に組み入れられ、小さい子どもですら日本のことを知るようになりました。

でも、それ以上にクリスチャンの人々がこの国に福音を広めるために今も出来るだけの努力をしています。そしてその努力が神の祝福を受け、今では教会や日曜学校が日本の各地に次々と設立されつつあります。どうか神が私たちの愛する祖国がそうであるように、この国に真の宗教的自由の礎としての聖書を人々に早くいきわたらせて下さるように、日本のすべての子どもたちが私たちの救い主イエス・キリストを知って成長することが出来ますよう祈ります。そして、神がこのささやかな本にも

祝福を与え、これらの手紙が神のメッセージとして多くのアメリカの子どもたちの心に何かをめぐめさせ、彼等のなかから海外に向いて神の農園での働き手となる者が出来ますように、すべての子どもたちが国内でそれぞれに良き働き人となるよう自覚を与えて下さい。これらの人々の派遣によって美しいこの国に神の国を築くことが出来ますよう祈ります。

ニューヨーク・アルバニーにて

一八七六年八月

メアリー・プライン

註(1) 『横浜共立学園120年の歩み』横浜共立学園

一九九一年 二二頁

(国立音楽大学)